

北島、世界新で「金」



男子百平で2連覇

男子100メートル平泳ぎ決勝 58秒91の世界新記録で優勝し、喜びを爆発させる北島康介
＝11日、国家水泳センター

求め続けた感激再び

【北京11日共同】北京五輪第4日の十一日、競泳の男子百メートル平泳ぎ決勝で北島康介(25)＝日本コカ・コーラ＝が58秒91の世界新記録で優勝し、

一九六八年メキシコ五輪から採用された同種目で初めて2連覇を果たした。前回のアテネ五輪で百、二百メートル平泳ぎ2冠の北島は競泳日本選手で最多3個目の金メダルを獲得。一九二八年アムステルダム、一九三二年ロサンゼルス両大会の二百メートル平泳ぎを制した鶴田義行らを抜いた。

今大会で日本の金メダルは柔道男子66キロ級で2連覇した内柴正人(旭化成)に次いで2個目。北島は百メートル決勝で、ライバルのブレンダン・ハンセン(米国)や十日の準決勝で59秒16の五輪新をマークしていたアレクサンドル・ダーレオーエン(ノルウェー)らを下した。

この感激を求め続けた。『チヨウ気持いいー』。アテネの夜空に歓喜の雄たけびを上げてから4年の月日が流れた。競泳男子百メートル平泳ぎの五輪王者、北島康介(25)＝日本コカ・コーラ＝は北京で再び世界の頂点に立つ興奮を味わった。アテネでは21歳。まだ勢いのある若武者だった。日本選手団のエースの貫禄を備えて取った今回の金メダルは全く意味が違う。北京までの道のりは長く、険しかった。

平泳ぎ2冠で夢を実現させた満足感の反動は、モチベーションの低下となつて現れた。「気持ちが上がらない」。二〇〇五年四月からプロ活動が本格化した、ひじやひじの痛みで練習ができず、同年と〇六年は日本選手に敗れた。国際大会でも優勝できなくなり「北島は終わった」との声も耳に入る。平井伯昌コーチ(45)は「水泳をやめるんじゃないか」と何度も不安に駆られた。

〇六年夏、転機が訪れる。七月上旬に高熱を出して入院。点滴を打ち、テレビを眺める毎日。日本水泳連盟の岩原文彦競泳委員(36)は病室に北島を訪ね、業を煮やして言い放った。「(水泳を)やめるのも一つだぞ」。

〇七年春、世界選手権(メルボルン)二百メートル優勝で苦境を脱した男は、うなずきながら言った。「人間、一回落ちるところまで落ちなきゃいけないんだ」。金メダルは競技者として、人間としての成長の証し。2大会連続2冠の野望実現へ大きく近づいた。

下野新聞

しもつけ

発行所 宇都宮市昭和1丁目8番11号
〒320-8686
下野新聞社
電話 028-625-1111
郵便振替口座00350-0-407
©下野新聞社

下野新聞社ホームページ
<http://www.shimotsuke.co.jp/>

電子号外

下野新聞購読お申し込みは
フリーダイヤル
0120-810081

ケータイ新聞
はじめました



月額262円(税込)
<http://mobile.shimotsuke.co.jp>